

富士の民話 あれこれ

慶長十八年（西暦一六一三年）、元吉原に創設され、東海道、吉原宿の移転の歴史とともに歩んできた唯称寺。（現在は吉原三丁目）

今回は、唯称寺の三代目の住職が、かつばを助けたときにもらった茶つぼのお話について、十七代目の住職、沢崎白雅さんに語っていただきました。

かつばの茶つぼ



昔、唯称寺が中吉原宿（依田橋の西）にあったころのことです。ある晩、和尚さんのまくら元一人の白いひげのおじいさんがあらわれました。おじいさんは、「私は、和田川の川下に住んでいるかつばです。先日の洪水で河合橋の近くにある私の住みかに馬鋏（農具の一種）がひっかかり、子供たちが出入りできません。どうぞ馬鋏を取ってください」と言って帰りました。

翌朝、和尚さんは、小僧さんを連れて河合橋まで行って見ました。すると、かつばの言ったとおり、和田川の土手の下の方に馬鋏がひっかかっています。

和尚さんは、「これだな」と思いながら、小僧さんと二人で苦勞して取り除きました。

その晩、夢の中にかつばがあらわれ、「和尚さん、どうもありがとうございます。これは、私が川底で拾った茶つぼです。ほんのお礼のしるしです。そして、これからは唯称寺が火難や水難に遭わないよう、私がお守りいたしますよう」と言いました。

朝になって和尚さんが玄関に出てみると、茶つぼと魚が置いてありました。この後、唯称寺は一度も火事に遭ったことはありません。ということなのです。

この話の中に出てくる茶つぼと馬鋏は、今もなお唯称寺に伝わっています。残念ながら一般公開はしていません。

写真の茶つぼは、手のひらにおさまるほどの大きさ。抹茶を入れるための茶つぼのようです。

「この茶つぼは、お茶つぼ道中が東海道を通ったときに落としたものかもしれませんね。」

かつばの恩返しかどうかは、わからないけれど、唯称寺は、確かに何度かあった吉原の大火を逃れています。



沢崎白雅さん（吉原）

こちら編集室

最近、身の周りでは、パパになったとかママになったとか、おめでたい話が多い。

あいにく我が家には、まだ子供はいないが、「子供ができたなら、あーしよう。こーしよう」「名前は何にする」「どんな子に育つのか」などと夢は広がる一方。今回から「かけ橋～まだ見ぬ君へ…」というコーナーをスタートし、夢や文化を子供たちに伝えていきたいと考えたのも、自分もいずれは人の親になるのだという自覚の芽生えかも知れない。

広報ふじの編集が終わるとすぐテレビ出演。休む間もなくハイスピードで過ぎていく時間。

何か楽しみでも見つけないと今の時間をもったいない。よーし車でも買いかえよう。待つこと1ヵ月。シルバーと紺色の4WDが多額の借金を代償に我が手中に。よーし仕事をガンバってアウトドアを始めるぞー。

今では読む雑誌もすっかり変わり、夏のキャンプや冬のスキーの夢を見ながら仕事ができるようになりました。（ほんとに行けるかな）

広報ふじは環境に優しい再生紙を使っています